

医学・医療は日進月歩であり、特に呼吸ケア領域では評価技術や人工呼吸器をはじめとした治療技術の革新はめざましいものがある。一方で、対象患者はより高齢化し、重複した障害を持つ患者も増えてきている。このようななかで、呼吸理学療法も医療の進歩に合わせた役割や治療技術の変化が認められる。本特集は、呼吸器医療の最近の変化や進歩を概観しながら、呼吸器ケア、リハビリテーションの過去 10 年を振り返り、理学療法士の存在意味を確認しつつ呼吸理学療法の進歩をまとめることで、時代のニーズに合った次世代の呼吸理学療法の役割を若い世代に伝達することが目的である。

■呼吸理学療法の過去・現在・未来（千住秀明，他論文）

呼吸理学療法は、1990 年代以降、肺がん、慢性閉塞性肺疾患(chronic obstructive pulmonary disease : COPD)、間質性肺炎などの増加、肺移植や肝移植など高度医療の進展、後期高齢者への外科療法の適応による術後合併症の予防、早期離床などを目的にニーズが高まり、特に急性期病院を中心に定着してきた。今後の発展には、呼吸理学療法で用いられている各手技の有効性の検証とエビデンスの蓄積を進め、また臨床現場では常に最新の知識を学び日々の実績に努め続けることが不可欠である。

■ COPD 患者に対する呼吸理学療法の進歩（高橋仁美論文）

呼吸理学療法は、コンディショニングと運動療法から構成される。従来、慢性閉塞性肺疾患(chronic obstructive pulmonary disease : COPD)患者に対する呼吸理学療法は、呼吸練習や呼吸介助などのコンディショニングが主体であったが、現在では下肢を中心とした運動療法へと変化している。運動療法のエビデンスは既に科学的に証明されているが、コンディショニングについては不十分で今後の課題である。また、より効果的な運動療法の実際、生命予後改善の有効性についての検討も必要である。

■神経筋疾患患者に対する呼吸理学療法の進歩（三浦利彦，他論文）

神経筋疾患の呼吸ケアは、2004 年の米国胸部医学会(ATS)の「デュシェンヌ型筋ジストロフィー(Duchenne muscular dystrophy : DMD)の呼吸ケアのコンセンサス・ステートメント」をはじめ、この 10 年に多くの国際的な学会からガイドラインやステートメントが発表された。習熟した医師や理学療法士などがチームを形成して、活動性や QOL を維持しやすいとされる非侵襲的陽圧換気療法(noninvasive positive pressure ventilation : NPPV)を活用するために、徒手や機械による咳介助 (mechanical in-exsufflator : MI-E)を積極的に導入するマネジメントが推奨されている。

■人工呼吸器の進歩と呼吸理学療法（鶴澤吉宏論文）

人工呼吸器は対象疾患の拡大や治療指針の転換、安全性向上などの背景から、患者との同調性やモニタリング機能の改善、新機能の導入などが進んでいる。最近では早期リハビリテーションの有効性が言われ、人工呼吸器装着患者への実施が推奨されている。リハビリテーションを実施する理学療法士は人工呼吸器の進歩によって得られるようになった情報(同調性の評価、肺メカニクスの評価、モニタリング画面など)を読み取り、治療や効果判定に反映できることが望ましい。

■ICU における急性期呼吸理学療法の進歩（嶋先 晃論文）

集中治療室における急性期呼吸理学療法は排痰手技偏重から多職種協働による包括的呼吸ケアへと進化している。近年、重症患者の予後に影響する問題としてせん妄や ICU-acquired weakness が注目されている。重症患者における早期離床はそれらの予防・改善に欠かすことができない重要な治療戦略の一つとして位置づけられるようになってきており、この分野でのリハビリテーションスタッフへの期待は大きい。